

職場における否定応答詞の使用

—性差に注目して—

野 口 芙 美*

The exchange of Japanese negative response words in the workplace :
Focused on gender difference

NOGUCHI Fumi

Abstract

Japanese negative response words include “iya,” “ie,” “iie,” and “uun.” The exchange of Japanese negative response words changes depending on the setting and the relationship between the speaker and the hearer including gender differences. However, previous studies so far have used biased data for women and none have analyzed gender differences. Therefore, in this study, I reexamined the negative response words in the data for gender and investigated whether gender differences appear there. As a result, I discovered that there was a difference in negative response word used between men and women. Negative response words tended to be used more between people of the same sex. On the contrary, in the use of negative response words in terms of the sex of the hearer, there are fewer women who used negative response words to address men, while men used more negative response words to address women.

Keywords : negative response words, gender difference, use in the workplace, politeness, discourse analysis

1. はじめに

日本語のいわゆる否定応答詞には、「いいえ」や「うん」などがあり、われわれは相手の発話あるいは自分の発話を否定する際にこれらの応答詞を使用している。奥津(1988)は「いや」「いえ」「いいえ」「うん」の四形を、肯定系応答詞(「はい」系)と区別して「いいえ」系応答詞と呼び、主婦の談話資料を用いて応答詞の使用実態を調査した。その結果、会話においては「はい」系が応答詞全体の9割以上を占め、「いいえ」系の出現は1割に満たなかったと報告している。さらに現れた「いいえ」系応答詞は、問いに対する否定ではなく、感謝や謝罪などの儀礼的発話への応答や先行文を持たない感動詞的な用法で多く用いられていることもわかった。このことから奥津は、日本人が「相手の発話に対して肯定的に応答するのが普通」で「会話の相手との関係をできるかぎり肯定的に友好的に保とうとしているということ」(p.181)とまとめている。

Brown & Levinson (1987) も、ボライトネス・ストラテジーの一つとして「一致を求めよ」「不一致を避けよ」の2点を挙げていることから、相手を肯定する行為に比べると相手を否定する行為は相手のフェイスを侵害する恐れのある行為であると考えられる。奥津(1988)のデータで「はい」系が「いいえ」系応答詞よりも圧倒的に多く出現したことも、われわれが無意識のうちに相手との不一致を避けようとしていることの表れであろう。つまり「いいえ」系応答詞を使用することは少なくとも形の上では相手を否定する行為であり、フェイスを

キーワード：否定応答詞、性差、職場における使用、丁寧度、談話分析

*平成27年度生 比較社会文化学専攻

脅かす行為の一つであると言える。フェイス侵害行為には相対的な力、社会的距離、フェイス威嚇行為の負荷度がフェイス侵害度を定める上で重要な要因となるとされており、中島（2001）でも指摘されているように、「いいえ」系応答詞の使い分けは場面などのあらたまり度、相手との関係等の待遇度にも大いに関係してくると思われる。中島（2001）では場面や親疎による影響については言及されているが、性差の違いによる使用傾向の異なりや対話者の性別との関連については、女性話者が圧倒的に多いというデータの性質上、考察の対象外となっている。しかしBrown & Levinsonも彼らの枠組みを用いる研究で急速に発展を見せているものとして、女性の言語使用、つまり言語におけるジェンダー研究を挙げている。つまり、性差はフェイスを脅かす言語行為において重要な要因を持つものの一つであると言える。しかし、他の応答詞研究を見ても、用法や機能に焦点がおかれ、性差をはじめ社会言語学的な視点についてはあまり議論されていない。

このことから本研究は、話者の性別の偏りのない、男性・女性の話者がほぼ同数の話し言葉資料を用い、「いいえ」系応答詞がどのように使用されているか再調査の必要性を主張し、これを試みるものである。そして、その抽出結果から「いいえ」系応答詞の使用に男女差が見られるかどうかを観察する。

2. 先行研究

2.1 応答詞研究

応答詞は、日本語教育学会編（1990）では「感動詞の下位分類で応答機能を持つもの」と定義されている。先に挙げた奥津（1988）は、肯定系応答詞「はい」「うん」「ええ」「はあー」を「はい」系応答詞、否定系応答詞「いや」「いえ」「いいえ」「ううん」を「いいえ」系応答詞と呼んでいる。本稿でも奥津に倣い、後者の四形を「いいえ」系応答詞と呼ぶことにする。

応答詞研究は、コーパス等の話し言葉を資料とした量的研究と、使用例を挙げてその機能や用法を記述する研究に大きく分けられる。前者には、先行する発話から分類を行った奥津（1988）、中島（2001）、後続する「そう」を含むコメントとの共起を見た土屋（1999）、真偽疑問文に対する否定的応答を見た吉田（2012）がある。後者には「いえ」「いいえ」「いや」の違いについて記述した富樫（2006）、「いいえ」の意味分析を行った渡邊（2014）、「いや」に注目した山根（2003）、小出（2012）、串田・林（2015）などがある。

次項では、本研究の比較対象とする、「いいえ」系応答詞の使用実態を量的に見た奥津（1988）、中島（2001）の2つについて詳しく紹介する。

2.2 話し言葉資料における「いいえ」系応答詞

奥津（1988）は『主婦の一週間の談話資料』（井出祥子他編）、中島（2001）は『女のことば職場編』（現代日本語研究会）をそれぞれ用いて、話し言葉資料の応答詞の出現数を調査した。奥津（1998）によると、各応答詞の出現数は「いえ」が最も多く全体の約4割を占め、次いで「いいえ」が約3割で「いや」、「ううん」と続いている。一方中島（2001）では「いや」が全体の約6割と圧倒的に多く、次いで「いえ」「ううん」と続き、「いいえ」はほとんど見られなかった。両者の研究資料には5年の開きがあるが、それよりもむしろこれらの差は主婦の談話と職場という対象の差に因るところが大きいだろう。しかし、このことについては中島では特に触れられていない。

また、奥津（1988）は先行する発話との関連から応答詞を16種類に分類した。このうち、「いいえ」系応答詞に当てはまるものだけを抽出すると12種類であるが、奥津はこの分類をさらに問いに対する否定などの「論理的否定」、謝罪や感謝などに対する否定の「儀礼的否定」と分けている。その結果、「いいえ」系応答詞全体で見ると「儀礼的否定」が「論理的否定」と同じくらい使用率が高く、「いいえ」系応答詞が相手の発話や問いを否定するという本来の否定的応答をしていないと指摘している。

中島（2001）はさらに、フォーマルかインフォーマルかといった場面差、使用者の世代差、相手との上下関係・親疎関係についても言及している。その結果、問いへの否定では、肯定「うん」がインフォーマル場面はもちろんフォーマル場面にも多用されているのに対し、「ううん」はインフォーマル場面の方に多くフォーマル場面には少ないと報告している。また、儀礼的否定では、「いえ」「いや」が多く、場面、世代、相手との関係にはあまり影響されていないと報告している。

以上の2つの先行研究は、ともに「いいえ」系応答詞の使用実態を量的な数値とともに明らかにした貴重な文献であるが、いずれも対象データは女性の発話に偏っている。そのため、性差による使用の違いについての言及はなされていない。

2.3 言語における男女差

益岡・田窪（1992）では「一般に、女性的な表現は、断定を避け、命令的でなく、自分の考えを相手に押し付けられない言い方をし、といった特徴を持つ。これに対して、男性的な表現は、断定や命令を含み、主張・説得をするための表現を多く持つ」(p.222)とし、具体的な例としては「ぼく」「あたし」などの一人称や「おまえ」などの二人称に代表される人称の使用傾向、終助詞や判定詞「だ」の有無を含む文末表現、「おい」「こら」「あら」「まあ」等の感動詞、敬語等ことばの丁寧さとその表現の違いを挙げている。日本語教育学会（1982, 1990）でも、ほぼ同様の記述が見られる。

感動詞については、益岡・田窪（1992）では男性が主に使うのは「おい」「こら」などの「強圧的に相手の注意を促すもの」で、女性が主に使うのは「あら」「まあ」など眼前の事態に対する驚きを表すものとあり、日本語教育学会（1990）ではさらに「おお」「ほう」が男性に見られる表現として挙げられているが、応答詞については言及されていない。

本研究では、感動詞の下位分類とされる応答詞にも男女の使用傾向の差があるかどうかを見るものであるが、日本語の男女差には丁寧度も重要な観点の一つであることから、応答詞の丁寧度も検討する必要がある。

3. 研究課題

本研究では、男性・女性の話者がほぼ同数のデータを用いて「いいえ」系応答詞の使用実態を特に性差の観点から明らかにすることを目的に、以下の研究課題（RQ）を設定した。RQはさらに①～④の細かい課題を設けた。

RQ. 談話における「いいえ」系応答詞の使用に男女差はあるのか。

- ①話者の性別の偏りのないデータにおける「いいえ」系応答詞の使用実態は、女性話者中心のデータを対象とした先行研究と異なっているか。
- ②話者の性別によって、「いいえ」系応答詞の使用は異なるか。
- ③対話者の性別によって、「いいえ」系応答詞の使用は異なるか。
- ④「いいえ」系応答詞の丁寧度による違いは、性差と関連があるか。

4. 研究方法

4.1 研究対象

本研究では、研究対象として『合本女性のことば・男性のことば（職場編）』（現代日本語研究会）を使用する。同資料は1997年に発行された『女性のことば・職場編』（以下、『女・職』）と2002年に発行された『男性のことば・職場編』（以下、『男・職』）の合本で2011年に出版されたものである。データの収集は、『女・職』が1993年9月～11月、『男・職』が1999年10月～2000年12月の期間において、20～50代の有職者を対象に首都圏で行われた。資料は、計40人の協力者のもとで3つの異なる場面各1時間ずつ収集された談話のうち、まとまった談話のある10分前後で、発話者総数は369人である。話者の男女構成は、男性193人（全体の52.3%）、女性135人（36.6%）、性別不明者等41人（11.1%）¹である。発話文は基本的に1文＝1レコード（＝1行）で、22,520レコードが収められている。発話レコードにおける男女の構成比は、男性10,446レコード（46.4%）、女性11,601レコード（51.5%）、その他473レコード（2.1%）²となっている。

4.2 分析方法

対象データから、「いや」「いえ」「いいえ」「うん」を抽出し、出現数と割合、先行文との関連から分類を行う。

分類方法については、次項4.3で詳しく述べる。その結果を、女性話者中心のデータを対象とした先行研究（奥津1988、中島2001）の結果と比較する。また、本研究で得られたデータについて、それぞれの話者と対話者の性を分析し、男女差があるかないかを観察する。いわゆる日本語の男女差は、ことばの丁寧さも検討すべき項目の一つであることから、応答詞が現れた文についてその文体が敬体（です・ます）か、あるいは常体（だ・である体）かどうかを見る。丁寧度については、敬体「です・ます」はいわゆる尊敬語や謙譲語とは丁寧度のレベルにおいて次元の違うものであると考えられるが、富樫（2006）は丁寧さによる「いや」「いえ」「いいえ」の使用の異なりを観察する際、例1、2のように文体を変えてその許容度を分析している。つまり、応答詞については文体の差もその使用に影響を及ぼしていることがわかる。そのため、本稿でも丁寧さに関する指標として文体差という視点で分析を行うことにする。なお、言いさし文や応答詞・名詞のみの発話など、どちらの文体か特定できない場合は、前後の文体で判断できる場合はそれに従って分類し、判断できない場合は不明とする。

- 例1. A このケーブルをつなぐんですか？
B いえ/いいえ/ (?) いや、違います。
- 例2. A このケーブルをつなぐんですか？
B ??いえ/??いいえ/いや、違う。

（富樫2006 p.28）

4.3 応答詞の分類

本研究では、中島（2001）の分類を元に³、先行する発話との関連から表1のように分類方法を設定した。分類は、「応答要求文に対する応答」、「応答非要求文に対する応答」「非応答表現」の3種類に大別し、さらにそれぞれ下位項目を設定した。分類は形式よりも機能を優先した。つまり、例3のように先行文が真偽疑問文の形式でも「要求」として用いられていれば「要求」に分類した。儀礼的応答については、中島（2001）のほか、小早川（2006）で報告されていた「気遣い」等の機能も追加した。

例3. 11B: もう1回(いっかい)見せてもらえます↑、いちおう、成績処理の。

11H: いや、これは、古いやつなんで。

（『男・職』）

表1 本稿における応答詞の分類

1. 応答要求文に対する応答
(1) 疑問文に対する応答
①真偽疑問文に対する応答
②付加疑問文に対する応答
③疑問詞疑問文に対する応答
(2) 要求文（命令文含む）に対する応答
2. 応答非要求文に対する応答
(1) コメントに対する応答
(2) 儀礼的応答（感謝、褒め、謝罪、遠慮、赦し、謙遜、気遣い）
3. 非応答表現（自答、自己発話否定、感嘆）

5. 結果と考察

5.1 「いいえ」系応答詞の使用実態

5.1.1 「いいえ」系応答詞の出現数と割合

「いいえ」系応答詞を抽出した結果、図1に示すように、全481例のうち「いや」が383例と最も多く8割を占めた。次に多かったのが「いえ」54例（11%）で、「うん」36例（7%）、「いいえ」8例（2%）と続く。図

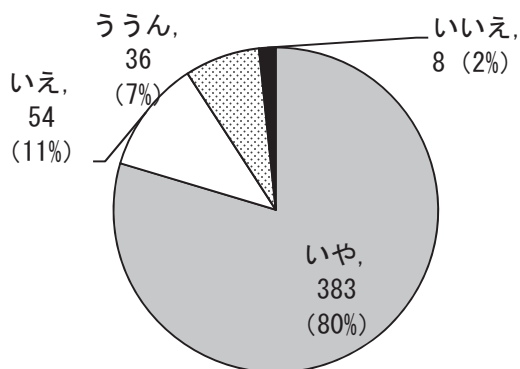


図1 「いいえ」系応答詞の出現数と割合

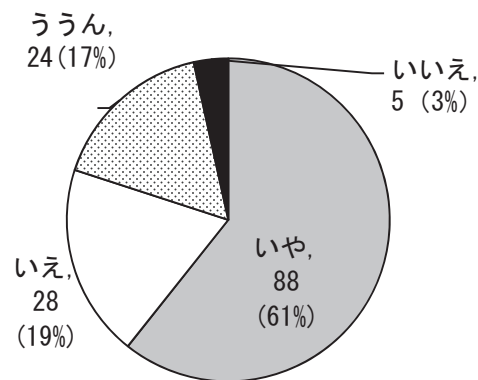


図2 中島(2001)に現れた「いいえ」系応答詞

2の中島(2001)の結果と比べてみると、「いや」が最も多いのは同じだが、その割合は20%もの差がある。つまり、男性には「いや」を多用するという特徴が予測できる。「いいえ」は、中島が主張していたように本稿の対象データでも全体のわずか2%しか現れず、実際の日常会話ではほとんど使われていないと言っていいだろう。一方、奥津(1988)では最も多く現れたのは「いえ」で、「いや」は全体の23.6%であった。また「いいえ」は「いえ」に次いで出現数が多く、全体の30.5%であったと報告されている。中島(2001)との違いは、奥津のデータが主婦の談話であったという点である。つまり中島も指摘しているように、職場というビジネス場面においては、「いいえ」によるはっきりとした否定は避けられ、意味範囲の広い「いや」が多用される傾向が窺える。

5.1.2 「いいえ」系応答詞の分類とその分布

4.3の分類に従って「いいえ」系応答詞を分類した結果を表2に示す。大分類では「応答要求文に対する応答」37.4%(180例)と「応答非要求文に対する応答」37.2%(179例)がほぼ同じくらい出現しており、「非応答表現」は13.7%(66例)であった。

「応答要求文に対する応答」では真偽疑問文に対する応答が21.2%(102例)と最も多く、付加疑問文9.8%(47例)と合わせると全体の31%となり、全体の3割は問いに対する否定として応答詞が用いられていることがわかる。

「応答非要求文に対する応答」の「コメント」は全体で最も割合が高く、30.1%(145例)出現した。奥津(1988)では「コメント」に対する応答は16.3%で本研究のデータと比べると割合は約半分である。職場では相手の意見に対して否定を行うことが日常生活よりも多いためであろう。一方、中島(2001)ではコメントに対する応答に該当する用法⁴は全体の23.4%で、本研究で男性のデータが追加されたことでその割合が増えている。「儀礼的発話」への応答は、奥津では全体の35.8%でありその使用率の高さを強調しているが、本研究では7.1%と奥津に比べてかなり少ない。中島(2001)でも11.0%で全体に占める割合は特筆するほどではない。

また、奥津(1988)では、本研究で言う「応答要求文に対する応答」に「コメント」を含めた用法を「論理的否定」と呼び、全体の39.5%で「いいえ」系応答詞が「本来の否定的応答の働きを案外していない」(p.175)と述べているが、本研究で得られたデータでは67.5%で、職場では奥津の言う「本来の」否定的応答の働きを十分担っていると言える。

表2 「いいえ」系応答詞の分類とその分布

		いや		いえ		いいえ		ううん		計	
応答要求文に対する応答	真偽疑問文	66	13.7%	17	3.5%	3	0.6%	16	3.3%	102	21.2%
	付加疑問文	35	7.3%	4	0.8%	1	0.2%	7	1.5%	47	9.8%
	疑問詞 疑問文	21	4.4%	3	0.6%	0	0.0%	0	0.0%	24	5.0%
	要求	7	1.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	7	1.5%
小計		129	26.8%	24	5.0%	4	0.8%	23	4.8%	180	37.4%
応答非要求文に対する応答	コメント	131	27.2%	12	2.5%	0	0.0%	2	0.4%	145	30.1%
	儀礼的 発話	16	3.3%	9	1.9%	4	0.8%	5	1.0%	34	7.1%
小計		147	30.6%	21	4.4%	4	0.8%	7	1.5%	179	37.2%
非応答表現		65	13.5%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.2%	66	13.7%
不明 ⁵		42	8.7%	9	1.9%	0	0.0%	5	1.0%	56	11.6%
計		383	79.6%	54	11.2%	8	1.7%	36	7.5%	481	100.0%

5.2 話者の性別にみる「いいえ」系応答詞の使用

話者の性別に各応答詞の出現を見てみると、図3に示すようにどちらも「いや」の使用割合が目立つ(男性267例88.1%、女性113例64.9%)が、男性は特にそれが顕著である。男性と女性の「いや」出現数を比較してみると、男性の使用は女性の2倍以上となっている。「いえ」の使用は、男性26例、女性27例と数だけ見ると男女差は見られないが、「ううん」は男性が8例、女性が28例と女性の使用が男性の3倍以上となっている。このほか、性別が不明である話者による「いや」が3例、「いえ」が1例見られた。話者性別の結果についてカイ二乗検定を行ったところ⁶、有意差が見られた($\chi^2(3) = 43.862, p < .01$)。そこで残差分析を行ったところ、男性による「いや」

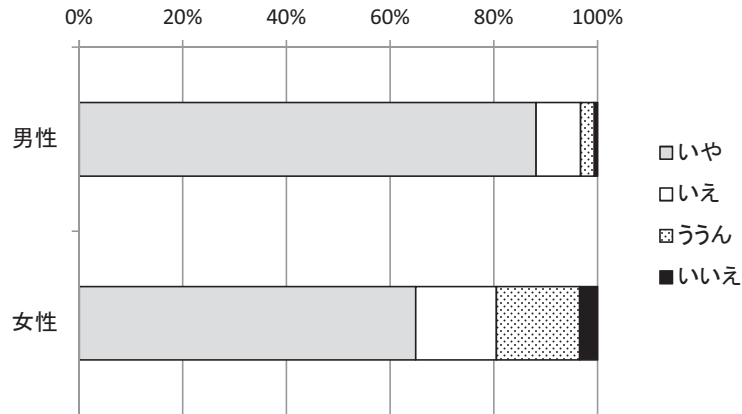


図3 話者の性別にみる「いいえ」系応答詞の出現数

の使用、女性による「うん」の使用は有意に多く、男性による「うん」の使用、女性による「いや」の使用は有意に多かった ($p < .01$)。「いえ」「いいえ」の使用については、男性の男性による使用が少なく、女性による使用が多い傾向がある ($p < .05$)。つまり、女性だけを見れば応答詞の中では「いや」の使用が最も多いが、男性と比べると少ないことがわかる。

5.3 対話者の性別にみる「いいえ」系応答詞の使用

「いいえ」系応答詞の使用者が、男性女性どちらに対して「いいえ」系応答詞を使用したのか、対話者の性を見てみる。発話者（応答詞使用者）の性別ごとに、対話者の性を割合で示したものが図4である。男性話者が「いいえ」系応答詞を使用する相手は、男性が159例で60.9%、女性が102例で39.1%と、対男性使用が半数を超えている。一方、女性話者が「いいえ」系応答詞を使用する相手は、男性69例（44.5%）、女性86例（55.5%）で、対女性の方が若干多い。つまり、どちらも同性に対してより多く「いいえ」系応答詞を使用している。発話者の性と対話者の性の関係性について、カイ二乗検定を行ったところ、有意差が見られた ($\chi^2(1) = 9.912, p < .01$)。残差分析の結果、既に述べたように同性から同性への使用が有意に多く、異性への使用が有意に少ない ($p < .01$)。

同じデータを対話者の性という観点から捉え直すと、図5のようになる。図5は、対話者の性別に、「いいえ」系応答詞がどちらの性から使用されたかを見たものである。対話者が男性の場合、「いいえ」系応答詞使用者は男性が159例（69.7%）で、女性は69例（30.3%）である。一方、女性に対して「いいえ」系応答詞を使用するのは男性が102例で54.3%、女性が45.7%と男性が過半数を超えている。

「いいえ」系応答詞を否定応答詞と捉えたとある傾向が浮かび上がってくる。つまり、男性を否定するのはほとんど男性で女性には否定されにくく、女性を否定するのは男性の方が多い、という傾向である。「儀礼的発話」に対する応答は、奥津（1988）が「儀礼的応答」として「語用論的にはむしろ肯定的な効果をあげるために使われる」（p.175）と述べているため、これを否定と捉えることには抵抗があるが、5.1.2で示したように本研究の結果では「儀礼的応答」は7.1%で全体から見るとわずかである。「儀礼的応答」以外にも「いいえ」系応答詞が常に何かを否定しているのかは議論の余地があり、特に「いや」については意見が分かれるところではあるが、山根（2003）は発話切り出しの際の「いや」も次の発話までの思考を経て「しかし」という逆接の意味合いを含んでいることから、根幹には否定を含んでいると捉えていると述べている。渡邊（2017）も、肯定／否定という2つの選択肢をもたない質問に対して用いられる「いいえ」は、相手の質問が前提としている考えやその内容に対して否定判断を下しているとの見解を示している。串田・林（2015）は否定ではないが「抵抗」という言葉を用いて疑問詞疑問文のあとに現れる「いや」を分析している。つまり、否定の度合いは違っても、「いいえ」系応答詞には否定の含意があると解釈することが可能だと考える。データ自体は応答詞の使用割合に過ぎないが、特に職場という環境でこのような傾向が見られることは、社会における女性の立場が未だ男性と対等ではないことが言語形式にも表れている例だと言えるのではないだろうか。

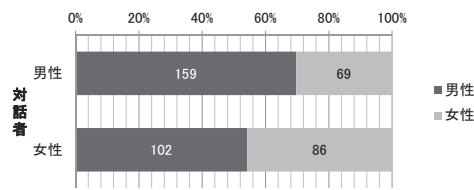
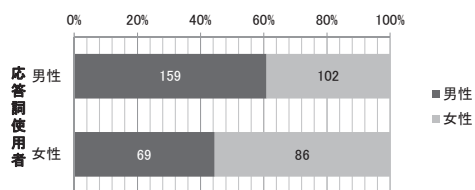


図4 回答詞使用者の性別からみた、対話者の男女の割合

図5 対話者の性別からみた、回答詞使用者の男女の割合

5.4 丁寧度みる「いいえ」系回答詞の使用

4.2の分析方法に従い、「いいえ」系回答詞が現れた文が敬体（です・ます体）か常体（だ・である体）かで分類した結果、全体では常体が242例で約5割を占め（50.3%）、敬体が231例で48.0%、不明が1.7%だった。回答詞別に文体の割合を見ると、図6のようになった。まず、「いや」は常体が52.5%、敬体が46.2%でやや常体の方が多かったが、4.2で示した例1で富樫が許容を疑問視しているほどには丁寧度との関連はないように思われる。実際に、本稿の対象データでも例4のように敬体の文で「いや」が使用される例が何例も見られた。一方、同じく基本的には敬体のスタイルをとっている話者が「いや」を使った直後だけは常体となる例も見られた。例5はその一例であるが、「いや」が一時的に話者のスピーチレベルをシフトさせるシグナルにも見える。

例4. 13I：それとも、指定されたおみあげがけっこう、地元からはあるんですかー↑

13G：いや、たまたまそれーぐらいですなー。 (『男・職』)

例5. 11F：じゃあ文理大は併設かねー。

11A：あー。

11C：いや、わかんない、(笑いながら) なんかよくわかんないけど、高師、いちお文理大だとゆうふうゆってましたけどー、本人は。 (『男・職』)

「いえ」と「いいえ」はどちらも75%前後が敬体で、常体と比べると丁寧度の高い表現形式であると言えるだろう。「いえ」と「いいえ」が女性に多かったことは、いわゆる女性のことばと言われている特徴とも合致する。言葉の中性化が指摘されて久しい現在、確かに男女特有と言われていた終助詞や、女性による「お」「ご」等の接頭辞の多用などはあまり見られなくなってきた。その一方で、男性よりも女性の方が丁寧に話す、というようなジェンダー・イデオロギーはいまだに根強いのかもしれない。

「うん」は中島(2001)が「非丁寧体」としたように8割近く(77.8%)が常体で使用されている。敬体でも2割近く現れているが、敬体に分類したほとんどの例が回答詞のみか体言で終わっており前後の文体によって判断したもので、「です・ます」のはっきりとした使用の共起はみられなかった。

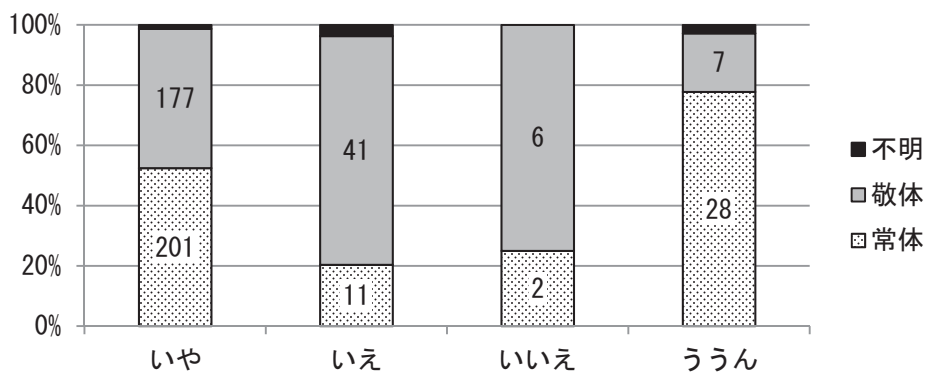


図6 文体別にみる「いいえ」系回答詞の出現数と割合

6. 結論

本稿では、これまで話者の性という点で偏りのあった「いいえ」系応答詞の使用実態調査を踏まえ、再調査の必要性から改めて性の偏りのないデータにおいて「いいえ」系応答詞の使用を見た。その結果、先行研究と比べてより一般化が可能な調査結果を示した。今後、さらなる応答詞研究の展開に際しても有用なデータとなることを期待する。

さらに、話者の性を条件統制した結果、これまで議論されてこなかった「いいえ」系応答詞の男女差について分析を試みることができた。その結果、応答詞別では、男性による「いや」、女性による「いえ」「いいえ」「ううん」の多用の傾向が見られ、性別による応答詞の使用に差があることが確認できた。また、話者の性別と対話者の性別を見たところ、「いいえ」系応答詞は男女ともに同性に対して使用される傾向が強いことがわかった。一方、対話者の性別から「いいえ」系応答詞の使用を見ると、男性に対する「いいえ」系応答詞の使用は男性が多く女性が少なかったのに対し、女性に対する使用は男性の方が多かった。つまり、女性は男性に対してあまり否定応答表現を使用しないという結果が出た一方で、女性に対して否定応答表現を使用するのは女性よりも男性の方が多いという偏った言語使用が見られた。丁寧度に関しては、「いえ」「いいえ」が敬体の文で用いられることが多く、この2つの応答詞が他の応答詞よりも丁寧度が高いことがわかった。どちらも女性による使用が多いことは、「男性よりも女性の方が丁寧に話す」というステレオタイプの女性の話し言葉の特徴と合致していた。

もちろん、応答詞の使用は性差だけでなく様々な要因がその使用に影響すると考えられる。今後、さらに分析を進めたい。

【註】

1. 「性別不明者等」には、性別が不明な話者の他、複数の話者によるものを含む。
2. 発話レコードの「その他」は、性別不明者による発話のほか、複数話者による笑いなどの非言語行為、「録音一時中断」などの状況説明を含む。
3. 中島 (2001) の分析対象は「いいえ」系応答詞だけではなく肯定系応答詞の「はい」系応答詞も含まれているため、本研究では「いいえ」系応答詞に該当するものを選別した。
4. 中島 (2001) の分類では「コメント」ではなく「叙述」としてあいづちの一部と捉えられている。
5. 「不明」は、どの分類にも当てはまらなかったもののほか、電話会話などで先行発話と考えられる発話が電話相手であった場合などが含まれる。
6. 検定はjs-STAR (version 8.0.1j. <http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/index.htm> ※2017年8月26日アクセス) を用いた。

【参考文献】

- Brown, P. & Levinson, S. (1987) *Politeness: some universals in language usage*, Cambridge University Press. (邦訳: ブラウン & レヴィンソン, 田中典子 (訳) (2011) 『ポライトネス—言語使用における、ある普遍現象』 研究社)
- 奥津敬一郎 (1988) 「『はい』と『いいえ』の機能」 井上和子編 『日本語の普遍性と個性に関する理論的及び実証的研究』 研究報告 4
- 串田秀也・林誠 (2015) 「WH質問への抵抗 感動詞「いや」の相互行為上の働き」 友定賢治 (編) 『感動詞の言語学』 ひつじ書房
- 小出慶一 (2012) 「『いや』の否定性と談話での機能」, 『埼玉大学紀要 (教養学部)』 47(2), pp.145-156, 埼玉大学教養学部
- 土屋菜穂子 (1999) 「感動詞の分類—対話コーパスを資料として—」, 『青山学院大学文学部紀要』 41, pp.239-255, 青山学院大学文学部
- 富樫純一 (2006) 「否定応答表現「いえ」「いいえ」「いや」」, 矢澤真人・橋本修 (編) 『現代日本語文法 現象と理論のインタラクション』, pp.23-46, ひつじ書房
- 中島悦子 (2001) 「自然談話における応答詞の使い分け—「はい」と「うん」, 「いいえ」と「ううん」—」, 『国士舘短期大学紀要』 26, pp.75-99, 国士舘短期大学人文学会
- 日本語教育学会編 (1982) 『日本語教育事典 (縮刷版13刷)』 大修館書店
- 日本語教育学会編 (1990) 『日本語教育ハンドブック』 大修館書店

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版

山根智恵（2003）「談話における「いや」の用法」、『岡大文論稿』31, pp.136-145, 岡山大学文学部言語国語国文学会

矢崎理恵（1990）「日本語教材に見る『はい』『いいえ』」、『東北大学日本語教育研究論集』5, pp.21-27

吉田史沙（2012）「真偽疑問文に対する否定応答の分類—「いいえ」の有無と話し手の意図を基準として—」、『国文目白』51, pp.1-13, 日本女子大学国語国文学会

渡邊真（2014）「現代日本語「いいえ」の意味分析」、『言葉と文化』15, 名古屋大学大学院・国際言語文化研究科・日本語文化専攻

渡邊真（2017）「はい」と「いいえ」の一考察：肯定、否定という二つの選択肢を有しない相手の質問に対する用法の考察」、『言葉と文化』18, 名古屋大学大学院・国際言語文化研究科・日本語文化専攻